

令和 7 年 6 月 27 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2024

課題番号：21K00094

研究課題名(和文) 世俗化の神学的起源の再解釈：近世イギリスにおける「キリストの受難」と初期公共圏

研究課題名(英文) Reinterpreting the Theological Origins of Secularisation: The Passion of the Christ and the Public Sphere in Early Modern Britain

研究代表者

花田 太平 (Hanada, Taihei)

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90817355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、美学と政治哲学の分離という初期公共圏の問題を、「キリストの受難」における「痛み」の機能に着目して研究を行った。その過程で俎上に載せたのが、初期近代と脱近代における方法論上の親和性と間主観性の問題であった。(1) 初期公共圏の問題に関しては、主に17世紀の詩人であり政治活動家のジョン・ミルトンやアンドリュー・マーベルのテキストを政治神学と経済思想史の文脈の中で再定位した。(2) 方法論上の再検討に関しては、近年の当事者研究やオープンダイアログなど脱近代の対話実践を通じて得た知見から、これまで焦点化されてこなかった初期近代テキストの「経験的・現象学的」な意味世界の重要性を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の感情史やナラティブ論などの知見を創造的に導入することにより、思想史の従来の方法論に現象学的な地平をひらいたことは、学術的に意義があるだけでなく、対話実践の現場においても依拠している理論や概念の歴史性や可変性への理解に寄与するものである。それは、近年注目されているオープンダイアログや当事者研究が、精神医療や社会福祉領域に閉じられた臨床実践ではなく、より大きな思想史の文脈に意味づけられることによって、潜在的には社会運動的なインパクトをもつ知見であることを示唆し、近代的市民権の中で脱主体化されていた存在の責任や政治的自由の基盤を強化することに貢献するだろう。

研究成果の概要(英文)：In this project, the issue of the separation of aesthetics and political philosophy in the early public sphere was examined, with a focus on the function of 'pain' in 'The Passion of Christ'. In this study, Hanada addressed the issues of methodological affinity and intersubjectivity in the early modern and postmodern periods. (1) Concerning the issue of the early public sphere, the primary focus of this study is the reinterpretation of the texts of 17th-century poets and political activists John Milton and Andrew Marvell within the context of political theology and the history of economic thought. (2) In terms of methodological re-examination, insights gained from postmodern dialogical practices such as Tojisha-kenkyu and open dialogue in recent years have enabled the rediscovery of the 'empirical, phenomenological' world of early modern texts that had previously been unexplored.

研究分野：思想史

キーワード：ジョン・ミルトン 思想史 痛みの感情史 ナラティブ 政治神学 キリストの受難 対話 ハンナ・アーレント

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

脱近代=ポスト世俗化といわれる今日の時代状況の中、啓蒙主義的な公私の分離に基づいた市民権や公的空間のあり方に異議が唱えられ始めている。近世思想史の分野でも近年、世俗化が直線的な近代への移行過程ではなく、西洋世界の政治的経済的拡大と連動した葛藤や反復、偶発性や破綻を孕んだ再帰的な過程であったことが明らかにされている。その中で「キリストの受難 (the Passion of Christ)」という主題は、初期公共圏を基礎づけるものとして、宗教革命における神学的な争点の中心であった。

信教の拡大にともなうキリスト教の分裂は、結果として、一方に組織的な中央集権の強化をもたらし、他方に宗教的な自己像の否定もいとわない分散と開放を促した。この近世ヨーロッパの世俗化過程の中心にはプロテスタント勢力による「キリストの受難」の否定があるとされてきた。だが、この従来の理解は、ポスト宗教改革の新たな公共圏が「キリストの受難」の理念型を単に払拭するものではなく、むしろ積極的にうちに含んだまま生起していった政治的文化的な交渉過程—すなわち「世俗化」の神学的起源—を不可視化するものとして機能しているのではないか、以上が本研究課題の基底をなす問いであった。

本研究に先立って研究代表者は、近世イギリスの世俗化過程を、当時のアメリカ入植や重商主義的な市場の拡大にみられるグローバルな経済変動と労働の再編成の中で、ポスト宗教革命の新たな市民像が「労働者」として再帰的に産み出されていく過程とした。だが、その新たな世俗的な労働概念が、どのような神学的な交渉過程から生起したのかを解明することができなかった。

本研究は、より構築主義的な視点からの分析を実現するために、近世イギリスの世俗化過程を新たな方法論により再考することを目的としていた。そこで、近年のナラティブ論と痛みや感情史の成果を援用することにより、「キリストの受難」を、「痛み」や「苦しみ」といった人間的で主観的経験の次元から再構築することを試みた。痛みがどのように表現され、誰の痛みが声として聞き届けられ、意義あるものとして記憶されたのか、あるいはまた、誰の痛みが否認され、沈黙の中で忘却されたのか—公共圏への包摂と排除をめぐるこれらの問いは、近世イギリスにおいてまず、「キリストの受難」を抽象化した形で生起し、「受難者(true sufferer)」として自らの政治的な立場を正統化/正当化するプラットフォームとして機能した。

具体的には、神であると同時に人間でもあるキリストの受難(Passion)は、その「痛み」を聞き届け(compassion)、証人となる者=信徒の存在によって、はじめて社会的意味をもつ。しかし、カルヴァン主義にとって、使徒によるキリストの否認に根をもつ人間の罪は、まさに人間には神を証言することはできないという信仰の条件を構成していた。この「受苦」という神の(人間的身体的な)「声」は、神学的には無意味なものとなる一方で、信徒の親密圏において行動規範を基礎づける感情=「身体の声」として再発見される。本研究では、その過程を新たな市民像が産み出されていく歴史実践として動的に描き出すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで神学的な教義として過小評価されていた「キリストの受難」を構築主義的な当事者知の次元で再検討することによって、近代化以前の「宗教社会」と近代の「世俗社会」が、痛みという生活世界のリアリティの次元では、断絶よりはむしろ連続性をもっていた点を明らかにするものである。「身体の語り(ナラティブ行為)」という次元で観察した場合、「キリストの受難」は、近世の労働現象が当事者知として社会的に構成されるためのモデルとして機能する可能性を示唆する。それは、これまで対立関係にあると理解されていた痛みと言語を「伝達する身体(communicative body)」というナラティブ論の身体観によって媒介することを意味する。この視点からは、「労働」とは、個人に内在するものとしてではなく、身体的痛みが言語を介して表現され、社会的に循環する形態として分析される。この「身体の語り」は、近世の身体観が「神の被造物としての身体観 (created body)」から、痛みの意味の抑圧や所有権を前提とした「機械論的な身体観 (mechanical body)」へ移行することによって解体していくのであるが、それは同時に「語り(ナラティブ行為)」という人間存在の複数性をもたらす間主観的なコミュニケーション行為の解体を意味した。

以上の探索的仮説に立脚し、本研究は、受苦体験という生活世界のリアリティの基底が、「身体の語り」を通してどのように公的に共有され、意味や感情、集団的記憶を産み出し、再帰的に「主体」や「公共圏」を構築するか、それを思想史の見地から解明する。本研究の学術的独自性は、「痛み」というこれまで感情史の枠組みで扱われた主題を世俗化研究の重要な論点として導入し、より重層的な歴史像を立ち上げる点に見出される。その上で、「痛み」を美学的に否認する傾向のある従来のウェーバー的なプロテスタント倫理に還元されない初期公共圏を、労働の痛みを包摂するものとして理論化する。感情史の文化的レジームの中から、本研究がとくに「痛み」を主題とした理由は、公的領域と私的領域、すなわち政治的行為(action)と身体的労働(labour)を架橋するその方法論的な可能性にある。強度の主観的体験であるがために他者の承認や否認を誘発するという「痛み」のハイブリッド性は、体

験・追体験・表象/語りからなる動的な循環構造に基づく。このような「痛み」のハイブリッド性に着眼する本研究の成果は、例えば労働と行為を厳密に分別し、公的空間から生命的必要を排除した政治哲学者ハンナ・アーレントのような影響力のある公共性論に対する発展的な修正を促すことが期待される。

3. 研究の方法

本研究は当初、以下のような研究計画を立てていた。

(1) 近年の痛みの感情史とナラティブ論の成果をふまえ、理論的枠組みを提示

マルクスやウェーバー以後の労働思想史は、近代的な経済変動に寄与する限りの近世ヨーロッパの日常実践を評価する傾向を払拭することができなかった。この方法論的限界を克服するために、近年の痛みの感情史とナラティブ論の成果を吸収しながら、「痛み」のような主観的経験が構成する社会的リアリティを記述するための理論的枠組みを提起する。

(2) キリストの受難が初期公共圏の生成に果たした役割の考察

以上の新たな理論的枠組みによって、初期公共圏の基盤の形成過程を解明する。具体的には、(a) イングランド内戦期から王政復古期以降の労苦の神学的機能をめぐる論争、(b) 処刑されたチャールズ 1 世の Eikon Basilike(1648-49)と革命派ジョン・ミルトンによる反論 Eikonoklastes(1649)代表される、イングランド内戦をめぐる政治的パンフレットにおける王の身体的表象のテキスト、(c) 詩や劇作品において変容する痛みや労働(者)の表象やナラティブ等を再解釈することによって、「キリストの受難」の神学的解体と美学的再構成の過程を明らかにする。近世イギリスにおいては、「痛み」をめぐる公的な表現として選ばれるのは美学的論争や神学的言説であった。とくに苦痛の中にある「他者」をいかに想像力によって再構成するかは「美的判断」(カント)の範疇で検討された。本研究は、エドモンド・バークが 18 世紀に「崇高(sublime)」概念として制度化する「痛みの美学化」の起源として、1660 年の王政復古以後の「公共性」をめぐるイングランド内戦の記憶の政治と美学上の論争に着目する。本研究では、それらの論争が、公的な「語り口(tone)」を形成していく中で、新たな時代の聴衆=市民権の射程が痛みや労働の表象を通じて形成されていく過程を明らかにする。

すでにオンライン上でデータ化されている資料(EERO)に加え、上記資料の多くを所蔵する British Library(ロンドン)や Bodleian Library(オクスフォード大学)等のイギリスの公文書館や大学図書館において複数回現地調査を実施する。

(3) 世俗化過程の再解釈をふまえ、近世(=脱近代)の公共圏の再定義化

「身体の語り」を基盤とした初期公共圏の構造を明らかにすることは、現在の脱近代の公共圏をめぐる問題系を考える上で大きな含意を提示する。生きられた痛みを通して産出される「混沌とした主体」について考察することにより、近代的市民権の中で脱主体化されていた存在の責任や政治的自由の基盤を強化する。当事者知の復権が目指すものは、専門知の相対化ではなく、宗教的他者をも包摂するような対話的空間概念の精緻化である。本研究の成果は、近世思想史が、脱近代の公共圏の危機と向き合う単なる参照点にとどまらず、危機と向き合う方法そのものであることを示す。

しかし、研究の初年度から新型コロナウイルス感染症が拡大し、海外渡航の制限や学内の危機管理対応部門への配属により、当初予定していた長期的な海外現地調査が困難となった。そのため、海外の現地調査に変えて、オンラインリソースでの調査や研究の方向性をより方法論的検討へと修正することになった。そのため、国内における理論的な研究や対話実践に関する研究などの割合が当初よりも大きくなった。

4. 研究成果

研究成果は、発表論文や書籍、学会発表の内容をもとに記述する。発表論文等の詳細は、「主な発表論文等」を参照されたい。

(1) 初期公共圏の問題

花田はブックチャプター「ミルトンと経済思想」(2025 in press; 2023 原稿提出)*において、ジョン・ミルトンの文学作品を通して、初期近代イギリスにおける経済思想の変容とその宗教的・倫理的含意を考察した。表面的には経済思想と無縁に見えるミルトンの詩作だが、マックス・ヴェーバーが『楽園喪失』に見出した禁欲的労働の倫理に象徴されるように、ミルトンの労働の詩学には宗教と資本主義を媒介する豊かな思想的布置が存在する。初期近代は、労働・貨幣・土地が宗教的制度から解放され、私的所有と市場原理が公共圏を再編成する時代であり、ミルトンが生きた時代もまた、家政術(*oikonomia*)から貨財術(*chrematistics*)への転換点にあった。

この転換は人間の存在理解にも深い影響を与え、労働は神的奉仕から商品化された活動へと変容し、人間の尊厳を脅かす要因ともなった。こうした危機に対して、ミルトンは『楽園喪失』においてイヴの分業提案に象徴される労働の再編成を描き出し、さらに『闘士サムソン』では奴隷的労働のうちに召命の倫理を見出す。そこでサムソンは、異教徒の支配下での重労働を神への奉仕として再解釈し、世俗的苦役に宗教的意義を重ねることで、苦悩を通じた神との関係性の再構築を試みる反英雄として描かれる。

花田は、こうした労働表象における経済メタファーの分析を通じて、プロテスタント的労

働観がいかに人間の内的世界と外的制度を媒介し、神学的倫理と市民的实践の結節点をなしていたかを論じた。特に、召命という概念が精神と身体、公と私、宗教と政治といった二項対立をいかに再編成したかを問う点において、ミルトンの詩学はヴェーバーの社会学を補完・批判する独自の思想史的貢献を成している。

花田は学会発表「痛みの感情史の中のミルトン：思想史の方法論をめぐって」(2024)において、感情史とナラティブ論の融合を通じて、近世思想史が脱近代の公共圏の危機に対峙する可能性を探究した。ミハエル・パフチンの対話主義に基づき、文学テクストを多声的かつ現象学的に捉え直すことで、「痛み (pain)」という感情の詩学的・政治的機能を再評価した。本研究では特に、ジョン・ミルトンの『闘士サムソン』を中心に、「痛みの政治」がいかに宗教的受難、国家権力、美学的表象に関わるかを検証した。チャールズ1世の『王の肖像』に見られる受難の政治化に対して、ミルトンは『偶像破壊者』で教義的批判を行い、受難を通じた王権の神聖化を否定した。この神学的立場は、王政復古後、機械論的世界観と対置される一元論的視座へと展開し、啓蒙主義の形成過程と対照的に位置づけられる。ミルトンが重視した「痛みの公共性」は、啓蒙思想が私的感情として切り捨てた領域であり、マーヴェルらの詩学を通じて、近代的公共圏の先駆として表象される。また、18世紀の崇高概念の萌芽は、この痛みが精神の受動 (passion) から精神の能動 (will) へ転化する契機を示した。

『闘士サムソン』における「痛み」は、他者との対話に根差した情動として描かれ、単なる内面の苦悩ではなく、公共的かつ倫理的空間の構成要素として機能する。ミルトンにとって世俗化とは、他者との関係において生じる現象学的な痛みであり、それを「受難」や「原罪」として一義的に制度化することは、痛みの本質を隠蔽する行為である。ミルトンの詩学は、神学的受難概念の解体と、美学的「痛み」の再構築を同時に試み、ポスト王政復古の公共圏の構想に新たな地平を拓いた。このように、『闘士サムソン』が描写する対話的空間は、痛みを抑圧する近代的公共圏とは異なるあり方を提示し、プロテスタント倫理の限界を超える可能性を示している。そこでミルトンの詩学には、責任、意志、公私の分離といった近代的主題に対する批判的再構成の契機が内在している点を提起した。

(2) 方法論上の再検討

花田は論文「当事者概念の思想史的考察：ポスト・ホロコーストにおける「語り口の問題」をめぐって」(2022)において、近年の社会福祉や精神医療の現場で注目を集める「当事者」という概念の理論的基盤を、ホロコースト以後の思想史的背景と照らし合わせながら再検討した。花田は、依存症自助グループや当事者研究、オープンダイアログといった新たな対話実践において、語りの内容ではなく「語り口 (tone)」そのものが当事者性を表出し、公共空間を形成する決定的要素となっている点に着目した。ユダヤ人哲学者ハンナ・アーレントと文芸批評家加藤典洋の議論を中心に、「語りの内容」ではなく「語り口」そのものが倫理的・政治的な対話空間の成立にとって本質的であることを論じた。本論は、アーレントがアイヒマン裁判において示したフリッパントな語り口が、同胞であるユダヤ人からの批判を招きつつも、むしろ死者の声を引き受ける応答 (response) として機能していたことを論じ、語り口が倫理的判断 (judgment) の担い手となりうる可能性を提示した。さらに、加藤典洋と高橋哲哉の「歴史主体論争」を分析対象とし、ポスト・ホロコーストにおける「当事者性」の再構築と「公共性」の形成が、日本においてもまた「語り口の問題」として浮上していたことを明らかにした。加藤が提示した「空の器」としての脱近代的自己像は、当事者研究が依拠する「わたしのことをわたしは知らない」という前提に通じ、語りの過程で自己と社会の関係性が再構成される契機を提供する。本論は最後に、当事者性とは単なる個人の属性ではなく、その語り口を通して非当事者に関われる倫理的・政治的営為であると結論づけ、語り口の理論化が新たな公共性の形成に資する知的枠組みであることを提起した。

「身体の語り」を基盤とした初期公共圏の構造を明らかにすることは、現在の脱近代の公共圏をめぐる問題系を考える上で大きな含意を提示する。そこで花田は、生きられた痛みを通して産出される「混沌とした主体」について考察することにより、近代的市民権の中で脱主体化されていた存在の責任や政治的自由の基盤を強化することが可能であるという仮説を立てた。当事者知の復権が目指すものは、専門知の相対化ではなく、宗教的他者をも包摂するような対話的空間概念の精緻化である。本課題の成果は、近世思想史が、脱近代の公共圏の危機と向き合う単なる参照点にとどまらず、危機と向き合う方法そのものであることを示すことを目指している。

以上の目的のために、花田は実践報告「オープンダイアログと大学教育～当事者と事例をふりかえる～」(2023)において、先の論文(2022)で明らかにした公的空間形成における対話的主体＝当事者性を語り手の「語り口 (tone)」が構成しているという仮説のもとに、主に「脱近代」を生きる現在の日本の若者が抱える存在論的不安やグリーフが、教育領域においてどのような表象や言説を通じて表現され、共有されているかを調査した。とくに改正障害者差別解消法以後の教育空間では、従来の評価の言語と求められるケアの言語との間に関係性の再構築が必要となる点を指摘し、学生の「成長」プロセスが、個人のキー・コンピテンシーの向上ではなく、傷ついた社会的ネットワークの修復・強化として構想される可能性を示唆した。主にオープンダイアログの中心的手法であるリフレクティングを使用した対話ワークショップを30回にわたり

実施し、聞き届けられ難い若者の痛みが「言語」ではなく「声」として受け止められるプロセスを観察分析した。

花田は論文「トラウマの中空構造の思想史：環状島モデルとポスト・ホロコーストにおける公的空間の再構築」(2025)において、精神科医・宮地尚子によって提唱された「環状島モデル」の思想史的基盤を再検討し、その中核をなす「中空構造」が現代のトラウマ理解と公共性の再構築において果たし得る役割を明らかにした。花田はまず、近代的主体が痛みを生物学的現象に還元し、その意味論的次元を排除してきたことが、ホロコーストや原爆投下といった20世紀の極限的災厄をもたらす文脈を構成してきたことを批判的に検討した。その上で、トラウマを中心に沈黙を抱える空間として構成された「環状島」は、当事者と非当事者、死者と生者の間の位置関係を動的に可視化し、証言の可能性と倫理的応答を促す社会的装置として再定義される。とりわけ 波打ち際 や エコトーン といった移行帯は、モノローグ的思考が支配する全体主義的空間と対比され、差異と共生に基づく対話的空間の生成を象徴するものとして提起される。さらに花田は、東日本大震災の復興政策への批判を通じて、環状島モデルがいかに個別的トラウマの風景論的把握に資するかを論じ、バフチンの対話主義、ヴィゴツキーの発達理論、オープンダイアログ、依存症自助グループにおける「自分なりに理解した神」概念等を援用することで、中空構造が語りの場の倫理的・政治的基盤となりうることを示した。最後に、強制収容所において内的対話を深めたユダヤ人女性エティ・ヒレスムの証言を取り上げ、内面化された神との対話に見出される新たな公共性の萌芽を記述した。以上の複層的考察を通じて、本論は、トラウマが内在的経験であると同時に、公共空間を再編成する契機として立ち現れる可能性を理論的に提示した。

*花田太平「ミルトンと経済思想」日本ミルトン協会編『ミルトン研究案内(仮)』(春風社, 2025年予定)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 花田 太平	4. 巻 105
2. 論文標題 当事者概念の思想的考察ーポスト・ホロコーストにおける「語り口の問題」をめぐってー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 麗澤大学紀要	6. 最初と最後の頁 27～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18901/0000001351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 花田 太平	4. 巻 108
2. 論文標題 トラウマの中空構造の思想史：環状島モデルとポスト・ホロコーストにおける公的空間の再構築	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 麗澤大学紀要	6. 最初と最後の頁 42～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18901/0002000171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 花田太平
2. 発表標題 オープンダイアログと大学教育：当事者と事例をふりかえる
3. 学会等名 オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 花田太平
2. 発表標題 痛みの感情史の中のミルトン：思想史の方法論をめぐって
3. 学会等名 日本ミルトン協会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ミルトン協会編	4. 発行年 2025年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 -
3. 書名 ミルトン研究案内(仮)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

花田太平研究室 https://hanadataihei.com/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------